

表紙の人

回一スクール目指し、

「文武両道」を地で行く

チーム二丸で

来年の箱根駅伝総合優勝目指す

陸上競技部駅伝主将

徳地悠一さん



「伝統」と「歴史」に気負いなし
『名門』というのには考えない

「箱根駅伝」の総合優勝回数、最多の14回。連続出場回数も最多の79回。「名門・中央大学駅伝チーム」主将の重責を担う。しかし、多摩キャンパス内の陸上競技グラウンドで初めて会った徳地悠一さん（法学部4年）からは、「伝統」と「歴史」を背にした気負いはまったく感じられない。

その日は風も無く、春を感じさせる暖かい日和。

穏やかな陽気がそう感じさせたのではない。気負いを感じさせないのは、きちんと足元を見つめ、問題点を整理して落ち着いて話をする物腰のやわらかさからくるのだ、ということが、話をするうちにだんだん分かってきた。

「名門」と言われることに対する徳地さんの考えからもそれがうかがえる。

『名門』とは昔の話です。名門や伝統校であるという事は、特に考えていません。勝たなければ意味がない。勝てるだけの実力をつける。それ

が必要で大事です」

確かに14回の総合優勝のうち、13回は40年余も前の記録だ。現役の選手が生まれるずっと以前の話である。中大が6連覇を果たした昭和39年（1964）以降は、平成8年（1996）の1回しか優勝していない。それからすでに12年が流れている。

ここ数年はシード権争いに低迷しており、「名門」といわれてもピンとこないのは、当然かもしれない。

125周年での総合優勝が大学の目標
チームワークを重視し、1年前倒し

「純粋に競技者として勝ちたい。大学が支えてくれる力を上手く利用して、勝利につなげたいと思う。目標はひとつ。2009年、箱根駅伝総合優勝です」ときっぱり言い切った。

ことし正月の第84回箱根駅伝で、エースの上野裕一郎選手（現、エスビー食品）を擁してチームが目標にしたのは「3位以内」だった。上野選手が卒業し、エースといえる選手はいなくなった。

にもかかわらず徳地主将が宣言したのは来年の「総合優勝」だ。

「チーム一丸となって、優勝を夢物語で終わらせない。優勝する為に、何をしていたらいいかを逆算して考え、日々、地に足をつけて頑張りたい

い。結果が全てです」と決意は固い。

中央大学は再来年の2010年に創立125周年を迎える。大学はその記念の年に箱根駅伝総合優勝を実現することを目標に掲げ、全学を挙げて駅伝をバックアップする体制に入った。徳地さんは、大学の目標を1年前倒ししたのだ。

自らにプレッシャーをかけたともいえる中で、「駅伝にはチームワークが大事」と強調。「選手



おのおのの考え方に耳を傾け、意見をしっかりと引き、みんなが納得してキャプテンについてくるよう、チームを率先して引っ張っていきたい」と熱く語る。そして、「高校時代の駅伝では、自分が区間賞を取ることに力を入れていたが、大学ではチームみんなのことを考え、監督を胴上げする様子を日々考えている」という。

「しっかりと周りを良く見て、周りの意見を反映できる、キャプテンに相応しい人」というのが、チームメイトの徳地評。駅伝主将は3年生になる春に同期生が集まり、話し合って決めるが、すぐに全員一致で徳地さんに決まったという。周りからの信頼を得て、徳地さんはこの1年間、「次期主将」として研鑽を積んできたのだ。

今年の箱根、自身の走りは60点 一度はやめようと思った高校時代

箱根駅伝には、昨年の9区に続いて、今年も「花の2区」に出場。トップと5秒差の5位でタスキを受け、各校のエース級と競って7位で3区の上野選手にタスキをつないだ。

「設定タイムを超え、監督には100点満点と言われたが、もう少し上に行きたかった。100%の力を出し切れず、自分では100点中60点だった」と率直に自己評価した。

中学校から陸上競技を始めた。サッカーや野球



にも興味があったが、友達から誘われたのがきっかけだった。短距離走を希望していたが、1500m走が学年で1番だったこともあり、周りの薦めで長距離走をやるようになった。中学は陸上中心の生活で、全国大会2位という好成績を残した。高校は神奈川県桐蔭学園に進んだ。高校時代は通学に2時間がかかる上、テストの成績でクラスが決められるため、勉強に力を入れた。そのため「なかなか練習に時間が取れず、練習不足だった」と明かす。それでも高校1年では、国体で800m走3位、2年では日本ジュニア7位、インターハイ6位という成績を残している。

だが、良い結果が出ない時もあり、中学の頃の

成績と比べられるのが辛くて、「2年のインターハイで、やめようと思ったこともある」という。ただ、高校はスポーツ推薦で入学したこともあって、「勝って学校に恩返ししたい。応援し、支えてくれる両親に恩返ししたい」という気持ちで陸上競技を続けた。

ロースクール進学のために中大入學 夢は検察官、練習の合間にセミナー通い

中央大学にはスポーツ推薦で入学したが、駅伝の名門であるからというのではなく、ロースクール進学に強いというのが選んだ理由だ。

「中学2、3年生の頃に学んだ憲法で興味を持

ち、ニュースで何の理由もなく、犯罪に巻き込まれ理不尽に裁かれている人を見て、『救いたい』と次第に弁護士や検察官を志望するようになりました」

今は検察官を目指し、練習が終わった夕方から早稲田セミナー・中央大学駅前校に通っている。チームメイトが箱根駅伝を目指し練習に励む中、自分は陸上をしながらロースクールを目指す毎日だ。

陸上競技と勉強の両立は大変ではないか、と聞くと、徳地さんは「上手く時間を使えば両立できます。上手にバランスを取る事が大事」と語る。

今までフルに単位を取得してきているため、4月



からは週に1回授業に出席すればいいそうだ。勉強にも真面目に取り組んでいる、徳地さんの一面がうかがえる。

空いた時間には、大学の図書室や、早稲田セミナーの自習室で勉強。週に1回のオフの月曜日は、身体を休めたり、オフに関係なく練習をする。練習は辛いこともあるが、日々前進することで、自分を強くするものだ、とポジティブに捉えている。



まさしく「文武両道」という言葉がぴったりに、徳地さんである。

◇ ◇ ◇
徳地さんのインタビューを通して、私の箱根駅伝に対する考えが180度変わった。今まではテレビの画面を通して見るだけで、今年もその時期が来たんだ、という位の気持ちで、箱根駅伝に対し奥深く捉えていなかった。しかし徳地さんの駅伝に対する熱い想い、その人柄を通し、駅伝の奥深さを感じ取ることができ、興味を持った。徳地さんを通して、駅伝のファンの一人になったのだ。これからは、駅伝ファンの一人として声援を送りたい。

(学生記者 梶原麗奈 法学部2年)